

第5分科会「子どもたちの心と学びを豊かに

～公共図書館と学校図書館との連携をいかに進めるか～

事例発表：恵庭市立和光小学校司書教諭	井上陽子氏
恵庭市教育委員会読書推進課主査	本間洋一氏
美瑛町図書館図書館司書	川嶋祐司氏
帯広市立帯広第一中学校司書教諭	稲見亜希氏

事例発表1 「本が好き・人が好き・まちが好き

子どもたちがいきいきとする学校図書館 ～公共図書館と連携して～

恵庭市立和光小学校司書教諭 井上 陽子

1. はじめに

読書のまち恵庭。その学校図書館の司書教諭として第五次「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」を読み解くことで、基本方針の4つの観点が見出すところを目指し今までの勤務校での実践から考察する。

2. 本に親しむ子どもを一人でも多く

(1) 不読率の低減～読み聞かせ、学校図書館を利用した授業実践の推進。高校へ読書習慣をつなげる探究的学習を進めていくことが課題。

(2) 学校図書館の利活用

～SLAの体系表をもとに、系統立てた学び。春秋に図書館利用学習。

(3) あふれだす学校図書館の授業実践～国語だけでなく理科、社会、図工、音楽でも情報源。

(4) 子どもの発想「オリジナル鳥獣戯画」～図書資料をもとに現代、未来の鳥獣戯画作成。

(5) 読書レストラン「メニュー表」～本の魅力を伝え合う手立てとしてのメニュー表。



3. 本を思わず手にしたくなるきっかけ作り

(1) 学校図書館で朝読書を～このクラスだけが図書館を貸し切りにできるスペシャル感。

(2) いつでもどこでも～学校図書館から働きかけ。廊下、階段展示。テーマ別コーナーなど。

(3) 常に使える図書館をキープ～情報のアンテナをはり、利用者の声を聴く。資料の更新。

4. 開かれた学校図書館

(1) 本のショーウインドー展～総合的な学習の成果を、市立図書館の展示コーナーで展示。

(2) 安心してだれもが過ごせる学校図書館～読書のバリアフリーに向けた読書環境整備。

5. 紙媒体とデジタル社会の融合

○デジタル社会に対応した読書環境の整備。紙、電子両面から本への興味がもてるように。

6. 社会全体で（子ども、学校、家庭、地域）

○子どもたちの視点に立った活動。地域で作る学校図書館。図書館の様子を地域に届ける。

7. おわりに

今後も学校図書館と公共図書館が、互いの活動について可視可することでそれぞれの活動を知り、一つの目的のために互いに連絡を取り合いながらも、独自に物事を進められるような連携を取れるように。

事例発表2 事例発表

恵庭市教育委員会読書推進課主査 本間 洋一

1. 全ての小中学校に常勤学校司書配置

(1) 経緯①1995年頃市立図書館の読み聞かせボランティアから学校での読み聞かせ活動へ。

②活動を通じて感じた学校図書館の問題から2002年「学校図書館を考える会・恵庭」設立へ（ボランティア・教諭・市議が参加）。教育委員会、市議会に働きかけ

③2003年「恵庭市学校図書館活動推進協議会」発足2004年市内8校の小学校（道内初）、2006年市内5校の中学校に常勤学校司書配置。（市内全小中学校に配置）

(2) 体制

- ・小中学校13校に学校司書（会計年度任用職員）1名を配置。所属は恵庭市教育委員会読書推進課。児童生徒数の多い小学校には1名追加加配。司書月一回のミーティング。
- ・読書推進課には学校図書館担当主査と学校図書館活動事務補助員1名を配置。
- ・2021年市立図書館と学校図書館のシステム一元化。

(3) 効果

- ・「全国学力・学習状況調査」内の質問「読書は好きですか？」は全国平均を上回る。
- ・「小中学生調べる学習コンクール」への応募 作品数：348、参加人数：355人



2. 市立図書館から学校図書館への配本

(1) 流れ

システムを通じて学校から市立図書館へ予約→市立図書館は確認・送付準備→火～金に市内13校へ毎日巡回して配本

(2) 利用者数（R4年度） 児童生徒のリクエスト：683冊、学校図書館特殊展示：239冊

(3) 団体貸出（R4年度） 学級文庫用図書：7,950冊 (2)(3) 合計8,872冊

3. その他の事業

(1) 物語定期便・・テーマに沿った図書30冊セットを2～3カ月展示し、市内各校へ順次巡回展

示。

- (2) 電子図書館・・2021年小中学生対象に開始。ID発行。1人1冊14日間(2022年より一般利用者も利用可)現在1474タイトル。

4. 小中学校以外の学校等への取り組み

- (1) 高校ブックライン～市内高等学校との連携。利用者カード別途発行。受取館に高校を指定。
 (2) 認定こども園等への図書配置事業～上限を設けた上、希望の絵本を幼稚園等に納品。

5. 教職員からの反応

高校教師から・・「恵庭の生徒とそれ以外の生徒で、読書習慣の差がはっきりと見て取れる。」

おわりに

コロナ禍の影響もあり、小中学校世代、加えて高校大学世代の読書・図書館への関心は高いとは言えない。様々な対策を講じる必要がある。

事例発表3 図書館と小中学校の連携について—事例報告—

美瑛町図書館図書館司書 川嶋 祐司

■美瑛町について

人口:9,490人 基幹産業:農業「美瑛豚」「美瑛小麦」ブランド化 観光:年間250万人訪れる

- 美瑛町図書館について～沿革:大正5年開館、公民館内移転独立を経て、平成24年現在地へ移転
 スタッフの構成～図書館スタッフ7名のうち4名が、学校担当スタッフとして町内すべての小中学校に配置。(会計年度任用職員、1名図書館司書資格者)

- 町内の小中学校 児童・生徒数 小学校:5校 385名 中学校:2校235名 計:7校 620名

■学校図書館司書の配置について

○経緯

平成26年 学校図書館法の一部改正を受けて学校図書館司書の配置、図書館システム化の検討

順次各校の電算システム化、司書による現状調査、市街地校への学校図書館司書配置を経て、

平成29年度 町内7校すべてに学校司書配置完了(市街地校3校、電算化システム完了)

○当初 教育委員会～「学校の指示に従ってください」 学校～「司書さんにお任せします」

担当司書～学校での仕事は初めてで、何をしてもよいかわからない。

⇒ 月に1度①図書担当の教諭(もしくは教頭)②学校図書館司書③司書の三者面談を実施。
 学校からの要望、学校図書館司書の悩み、司書からの提案等を話し合う。



- 学校図書館との連携①・・教室・図書館への図書貸し出し(1クラス40冊、月1回入れ替え)
学級文庫として、図書室に設置するため→本を手にするチャンスを増やす
- 学校図書館との連携②・・長期休業貸出の実施(小学校のみ) 事前に要望を募る
貸出実績 一人2.5冊 1082冊、ボランティア団体「みんと」の協力
- 学校図書館との連携③・・よみきかせ(小学)、ブックトーク(中学)、ビブリオバトルの事前準備と審査員(中学)、委員会活動への協力(中学)
- 学校図書館との連携④・・学校図書館と公共図書館で共同特集展示(同じ展示を同時に行う)
教職員によるおすすめ図書コーナーなど・・・保護者や学校にかかわりのない人にもアピール
- 子ども読書応援事業について・・読書通帳～1冊終わるごとに、本を1冊プレゼント(0歳から中学まで)

- 学校図書館司書の勤務について
市街地校は各2名(シフト制で1名ずつ)週3回1回4時間程度、小規模校は各1名、週1回4時間弱
- 学校図書館司書の業務内容
台帳管理、書架管理、背ラベルの統一・補正、購入・選定・受入、貸出・返却、特別展示・装飾、よみきかせ、蔵書点検
- 美沢小学校の取り組み・・へき地保育所と交流事業の一環として、よみきかせによる交流。

- 今後の課題・取り組みたいこと
 - ・書架の増設 ・除籍の適宜実施 ・学校・教育委員会・図書館の役割の明確化
 - ・授業での図書室活用の推進(タブレット中心になりがち。もっと本の利用を)

事例発表 4 事例発表

帯広市立帯広第一中学校司書教諭 稲見 亜希

1. はじめに

帯広市の小中学校の学校司書配置は0校。「帯広市学校公共図書館研究会」を組織。
帯広市図書館の職員協力のもと、研修、情報交流によって学校図書館の運営に役立っている。

2. 帯広図書館と帯広市内学校図書館の連携 内容の紹介

1) 子どもの読書活動への支援

①電子図書館の学校現場での活用

小中学校の児童生徒全員にID配布。気軽に電子図書を利用できる。
頻繁に利用。

②リユース会

公共図書館で役目を終えた絵本や児童書を、学校図書館で再活用。年1回開催。



2)調べ学習等への支援

①パスファインダーの作成・周知

小学生対象。北海道・地域に特化したテーマで作成。図書館HPから閲覧・印刷可能。
必要時にすぐ利用できる。年1回パスファインダー利用ガイドを小学校3年生に配布。

②ぶっくーる便

朝読書、調べ学習支援。35冊1セットに2週間貸出。配達回収は帯広図書館が支援。

3)学校図書館の環境整備への支援

①学校図書館クリニック事業

年1~2回実施。帯広図書館司書からアドバイスをもらい、実際に実施。人気が高い事業。

3. 帯広図書館と帯広学校図書館の連携 今後の方向性

○各校の図書館担当者は、専門的な知識やアドバイスを求めている。「気軽につながれる・相談できる図書館」を要望。市図書館側の予算や人員など運営形態を理解した上での連携を。

○「双方にメリットのある連携」へ。児童生徒が公共図書館に親しみをもち、利用者になる取り組みも。(中学生の職場体験、POP作りなど)「子どもたちの心と学びを豊かに」という共通の目的を持って、お互いに意見交換・交流していきたい。

【質疑・応答】

Q:調べ学習で本とタブレットはどのくらいの割合で利用されているのか。

A(井上):複数の情報源から調べることに、確かな情報源から調べるのが重要。発達段階に応じて使い分けていく。

Q:小中は市教委の管轄だが、高校は市教委に絡みにくい。高校の図書館の利用が少ないのが悩み。

A(井上):小中高の連携が重要。小中で養った力が高校まで引き継がれるように。

(野村):人の問題も大きい。学校司書の配置は小中が3割に対して、高校は1割程度。全国平均は7割なので、北海道は低い。地方交付税の使い方が自治体それぞれで難しいところがある。

【情報交流】

学校図書館と公共図書館の一元化はどの程度まで進んでいるのだろうか。

コンピューターで一元管理されているところ→石狩市、大空町、当麻町。

栗山町→小中はパソコンで管理。公共図書館の配本システムは確立していない。学校専門の図書司書がいる。

【感想】

公共図書館には本業があり、時間も資源も人員も限られている。学校と公共図書館はもたれあう関係ではなく、それぞれ独立して業務を行い、その上で連携し、話し合いの機会をもって意見交流、情報交流をしていくことが大事。司書も司書教諭もそれぞれの専門性をもって仕事をするなかで、学校図書館、公共図書館の双方がメリットのある連携になることが重要ではないだろうか。